『春になれば』

【登場人物】

佐々木日菜子（１２）（１３）中学生

佐々木たつ（９０）日菜子の祖母

佐々木幸太郎（１６）（１７）日菜子の兄

佐々木洋子（４５）日菜子の母

佐々木勇（５２）日菜子の父

松本博美（１２）日菜子の同級生

○日名子の家（居間）

ぶかぶかのセーラー服をきているのは、佐々木日菜子（１２）。それをみているのは佐々木たつ（９０）。

たつ「似合う、似合う」

日菜子「あのな、中学校ってめっちゃ人おるよ」

たつ「そうかね」

日菜子「なんとクラスが３つもあって」

たつ「そうか、そうか」

日菜子「学校も大きくてな、桜がいっぱいさいてて綺麗で」

たつ「あれ？もう春になったんかい？」

日菜子「ばあちゃん、なに言ってんの。とっくに春だよ。４月でひなは、中学生になったの」

たつ「はて一昨日、正月の餅、食べたんじゃなかったっけ？」

玄関がガラッと開いた音がして

勇の声「ただいまー」

日菜子「あ、おとーさん、帰ってきた！」

居間に上がってきた佐々木勇（５２）、農作業着姿。

そこに台所から出てきた割烹着姿の佐々木洋子（４５）がやってきて、

洋子　「遅かったやね。あれ？幸太郎は？」

勇　「今、外で荷物おろしとる。（日菜子みて）相変わらず、ちっこいな」

と、日菜子を持ち上げようとする。

洋子「はいはい、手を洗ってから。ほら、ひなも制服、脱ぎなさい」

日菜子「はあーい」

洋子「お義母さんも、ご飯だから。手洗って」

たつ、よっこらしょと立ち上がり、台所のテーブルに並べられている夕飯をみて

たつ「ありゃ、ひなに騙された。やっぱり、今日が正月やな」

日菜子「もー。おばあちゃんはー」

玄関がガラッと開いた音がして

幸太郎の声「お腹すいたあー、おかーさんごはん！」

○日名子の家（台所）

テーブルには、「入学おめでとう」と書かれた小さいケーキと、洋子の手作りと思われるご馳走が並ぶ。

日菜子、洋子、勇、たつ、佐々木幸太郎（16）の5人が美味しそうにご飯を食べている。

○日名子の家　外観（朝）

日菜子の家に朝日があたる。

○日名子の家（玄関）

制服姿の日菜子と、幸太郎。

洋子の声「ほら、早くいかんとー。ひなは、バスなんだから」

日菜子「はーい」

幸太郎「大丈夫―。俺がバス停まで送るから」

日菜子「おかーさん、いってきまーす」

○バス停へと続く道

幸太郎、日菜子を後ろにのせて自転車で走る。

幸太郎「二人乗り、おかーさんには内緒だぞ」

日菜子「うん」

道横に、満開の桜の大木がある。その木の横に茶色い服を着た２０歳ほどの男の人が立っている。

日菜子と目が合って、手を振る男の人。

日菜子も手を振り返す。

○村のバス停

山の中の一本道。周りに民家はない。

バスがやってくる。

日菜子「きた！」

幸太郎「あれに毎日のるんだぞ」

バスが止まり、ドアが開いて

日菜子「いってくる」

バスにのりこむ日菜子。

それを見送る、幸太郎。

○バスの中

バスの乗客は、日菜子１人だけ。

バスの後ろの座席に座っている、日菜子。きょろきょろ回りをみている。

バスが止まりドアが開き、日菜子と同じセーラー服を着た松本博美（１２）が入ってくる。博美、日菜子をちらっとみて無視し、前方の席に座る。

バスの運転手日菜子と博美の姿ミラー越しに見て、バスを発車する。

○中学校前のバス停

走り去るバス。そのバスから降りた、日菜子。先に歩いている博美を追いかけて

日菜子「おはよう」

博美「（小声で）おはよう」

日菜子「あのさ、私、佐々木日菜子っていうの。さっきのバス一緒だったよね？」

博美「だから、何？」

日菜子「山からくるの、うちらだけだよね。ねえ、最近こっちにきたん？いつ？家どこ？」

博美、無視して歩く。

日菜子「ねえ、名前、なんていうん？」

博美「（ぼそって）松本博美」

日菜子、聞こえなくて

日菜子「え？なになに」

博美「ま、つ、も、と、ひ、ろ、み！」

日菜子「ほう：」

博美「私はこんな山の中、いやだって言ったのに！」

日菜子「：一緒。私も山ん中、嫌い。だって友達、誰もおらん。：やった。中学校すごい。友達ができた」

博美「：友達？」

日菜子「ねえ！帰り、一緒に帰ろ！！」

博美、うんざりした顔をする。

○バスの中

夏服のセーラー服を着ている、日菜子。
バスが止まり、同じく夏服の博美が、
日菜子の隣に座る。

博美　「問題の４番わかった？」

日菜子「え？何それ？」

博美　「ひな、また忘れたね」

日菜子「宿題、今日まで？」

博美「そうに決まってんじゃん」

日菜子「うわー。全然やっとらん」

博美　「（視線を感じて）やだよ」

日菜子「一生のお願い」

博美　「やだやだ、だってばれるもん、絶対」
バスの運転手、二人をミラー越しにみて、ふっと笑う。

○日名子の家（台所）
クリスマスのご馳走が並ぶテーブル。
席には、日菜子、博美、幸太郎、たつ、
洋子。

幸太郎「せーの」

日菜子、博美、幸太郎「メリークリスマース」
洋子　「さー、みんな食べましょ」
たつ　「ありがたいねえ、正月だねえ」
幸太郎「ばあちゃん、今はクリスマス」
日菜子「おとーさん、寄合いだっけ？ケーキ
　食べられなくて、かわいそう」
洋子　「なーにが、かわいそうなもんですか。
　酒飲みにいっているんだから」
博美「うちのお父さんも、今日すっごく嬉し
　そうにしてた」
幸太郎「俺も早く寄合いに行って、酒飲んで
　みたい」
洋子　「何、言ってんの」
たつ　「…寄合いなんか、行っちゃだめだ」
幸太郎「え？」
たつ　「あそこに行ったもんは、みんな戦争
　に行ってしまう」
洋子　「お義母さん、今はそういう寄り合い
　じゃないんよ」
たつ　「戦争はあかん。行った者も残された

者もいなくなる。食べるものがなくなって、食べられないが続いて、みんな死んでしまう」

博美「…わかる。うちのお母さんも、食べれなくなって、それで、死んじゃった」

洋子「博美ちゃん…」

博美「ご飯も、野菜も、肉も食べられなくなって死んじゃった。何にも美味しくないって言って。だからお父さん、農業始めたって：」

幸太郎、立ち上がりテーブルの料理をさして、

幸太郎「これは、俺が採ってきた大根とホウレン草。こっちはこの秋に採れたジャガイモだ。あとこれは母さんが作ったチキン。ひなも料理、手伝った。全部、食べていいからな。これからも俺がすごい美味しいもの、採ってきてやる」

博美、うなずく。

たつ「正月は沢山、食べられてほんにええ」

日菜子「ばあちゃん、だから、クリスマスだってば」

博美、くすっと笑い、それにつられてみんな笑う。

○バスに続く道

緑の映える日。制服姿の幸太郎（17）と日菜子（13）。

幸太郎、日菜子を自転車に乗せ、2人乗りで走っている。

日菜子「お兄ちゃん、大学、農業科うけるって本当？」

幸太郎「誰にきいた？」

日菜子「お父さん」

幸太郎「そうだよ」

日菜子「喜んでたよ、お父さん。後継いでくれるって」

幸太郎「ふーん」

道横の桜の大木を通り過ぎる。

桜の花は満開。その木の下に軍服姿の

男の人が立っており、日菜子に手を振り、日菜子も手を振り返す。

幸太郎「お前、誰に手ふってんの？」

日菜子「え？あそこにいる人」

桜の木の下には、誰もいない。

日菜子「あれ？おかしいな」

桜の花びらが、空を舞っている。

了